

認知意味論の観点からみた多義動詞の意味分析方法 — 多義動詞の意味記述の精緻化を目指して —

崔 曉文

要 旨

本研究は、多義動詞の意味記述を精緻化させるために、多義語分析の4つの課題を巡り、これまでの研究でどのような手法が使われ、その適用範囲がどのようになっているかを検討した。分析の結果、以下のことが明らかになった。1) 多義動詞の意味分析の理論的枠組みには主に「意味拡張モデル」と「共通図式モデル」という二つのアプローチがあり、意味記述の精緻化を目指すならば、個々の語義を網羅的に捉えられる「意味拡張モデル」を用いることが望ましい。2) プロトタイプ的意味を認定する際、「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」を分けて議論を展開し、両者の分析結果が一致するかを調べる必要がある。3) 複数の語義を認定する際、「関連語と共起項を組み合わせた方法」の適用範囲が最も広い。4) 複数の語義の相互関係を分析する際、3種類の動機付けだけではなく、意味展開パターンを精緻化させる必要がある。以上の結果に基づき、意味記述の精緻化を目指して今後の多義動詞の意味分析研究の可能性を提示した。

【キーワード】 多義動詞、理論的枠組み、プロトタイプ、語義認定、意味展開パターン

1. はじめに

日本語の多義語は日常生活において使用頻度が高く、外国語教育でも習得の早い段階で導入されるものが多い。第二言語（以下、L2）学習者が多義語を習得する際、辞書に記載された語義を丸暗記したり、母語の対応語に対訳したりして覚える場合がほとんどである（松田, 2006a）。このような学習方法では、語義間の関連性が理解できないだけでなく、母語対応語の意味領域とずれがある場合に負の転移が生じる可能性もあるため、学習の効率がよくない。

一方、国語辞典の語義羅列とは異なり、認知意味論の観点では、多義語の複数の語義はカテゴリーの成員としての典型性を異にし、中には中心的なものと周辺のものが存在し、それらがお互いに関連してカテゴリーを形成している（Lakoff, 1987）。このような観点を踏まえ、1980年代以降、英語前置詞“Over”¹をはじめ、様々な多義語の意味構造を分析する研究が増えてきた。日本でも近年認知意味論の観点から多義語の意味構造に関する研究が盛んに行われるようになった。

これまでの研究を見ると、日本語格助詞と動詞、名詞、形容詞を対象に数多くの研究成果が蓄積されてきた。しかし、同じ多義語に関する研究でも、研究者によって分析結果が一致しないことが珍しくない。このような結果はL2学習者にとって混乱の原

因ともなりうる。意味分析結果の不一致をもたらす原因について松本（2009）、森山（2016）は、理論的枠組みの相違や分析手法の不備による部分があると指摘し、多義語の意味記述法と意味分析の方法論を整備させることで、分析結果の不一致をある程度解消することができるとしている。また、靱山（2001）では多義語の分析にあたり、1) 理論的枠組みの解明、2) プロトタイプ的意味の認定、3) 複数の語義の認定、4) 複数の語義の相互関係の明示の4つの課題について議論する必要があると主張している。そこで、本研究ではこの4つの課題を巡り、これまでの日本語多義語の意味分析で用いられた手法及びその適用範囲を再検討することにより、意味記述の方法を精緻化させることを目的とする。ただし、多義語は品詞によって適用する分析方法が異なるため（田中, 2004）、本研究では対象語を多義動詞に絞ることとする。研究課題は以下の通りである。
RQ: 多義動詞の意味分析では、靱山（2001）の4つの課題を巡り、どのような手法が使われ、その適用範囲はどのようになっているか。

2. 理論的枠組みの解明

多義語分析の理論的枠組みは語の構造全体に個々の語義を位置付けるものである（靱山, 2001）。これまでの多義動詞の意味分析で使用された理論的

枠組みで主流となっていたものは「意味拡張モデル」と「共通図式モデル」という2つのアプローチである(松田, 2006b)。(表1を参照)

表1. 理論的枠組みの分類

モデル	理論的枠組み	研究例
意味拡張	放射状カテゴリー	Lakoff(1987):Over 李(2015):おす
	ネットワーク・モデル	Langacker(1987):Ring 小川(2018):のむ
	意味ネットワーク	瀬戸(2007a):Crawl 森山(2012):切る 大西(2016):見る
共通図式	コア図式	田中(1990):Take 松田(2006a):ひく 松田(2006b):とる
	現象素	国広(1994):ふく

「意味拡張モデル」は多義語の複数の語義の拡張関係に焦点を絞るものであり、欧米で主流となる分析モデルにはLakoff(1987)の「放射状カテゴリー」(図1)とLangacker(1987)の「ネットワーク・モデル」(図2)がある。Lakoff(1987)は多義語の複数の語義があるプロトタイプの意味(図1●)を中心に、様々な動機付け²によって周辺の意味(図1○と□)へ拡張し、全体的に放射状カテゴリーを形成するとしている。日本語に応用した研究には李(2015)の「おす」などがある。一方、Langacker(1987)はプロトタイプとスキーマに基づく「ネットワーク・モデル」を提唱し、ある多義語の全ての語義がプロトタイプの意味からの拡張(図2破線)と語義の共通成分であるスキーマによる意味の統合(図2実線)によって関連付けられるとしている。日本語に応用した研究には小川(2018)の「のむ」などがある。

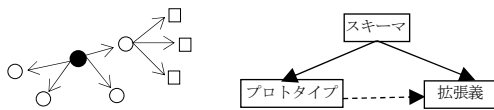


図1. 放射状カテゴリー 図2. ネットワークモデル

しかし、これらのモデルで日本語の多義動詞の意味関係を捉える際、次のような限界が見受けられる。まず、「放射状カテゴリー」ではシネクドキ(提喩)という動機付けがメトニミー(換喩)またはメタファー(隠喩)の一種とみなされ、重視されていない(瀬戸, 2007a)。次に、「ネットワーク・モ

デル」ではメタファーとシネクドキによる意味拡張は表せるが、メトニミーによる意味拡張は表せない(松本, 2003; 瀬戸, 2007a)。このような限界を克服するために、日本では瀬戸(2007a)は「意味ネットワーク」の枠組みを提案した。多義語はプロトタイプの意味を起点に、メタファー、メトニミー、シネクドキという動機付けによって意味が拡張する。また、それぞれの拡張義からさらに意味拡張が起き、全体的にプロトタイプを中心とした放射状カテゴリーを形成するとしている。このモデルを用いて多義語の様々な意味関係を包括的に捉えられるという。実際、森山(2012)の「切る」、大西(2016)の「見る」など、日本語多義動詞の意味分析研究の多くがこのモデルを採用していることがわかる。

一方、田中(1990, 2004)、国広(1994)は「意味拡張モデル」と正反対の方向から議論を展開し、多義語の全ての意味が1つの抽象的な「共通図式」に還元できるとしている。「共通図式モデル」はBolinger(1977)の「一つの形には一つの意味」という主張を基本的な考えとし、多義語の語義を個々に捉えるのではなく、ある抽象的な概念イメージで理解しようとするものである。田中(1990)はそれをコア³図式、国広(1994)は現象素⁴と定義付けた。コア図式を提唱した田中の一連の研究は英語動詞を分析対象にしたが、それを日本語に応用した研究には松田(2006a)の「ひく」と松田(2006b)の「とる」などがある。現象素を提唱した国広(1994)は動詞「ふく」を対象に議論を展開し、その有効性を唱えている。しかし、「共通図式モデル」に対して批判的な研究者もいる。Taylor(1989)は英語“Climb”を例に取り上げ、多義語の全ての語義から必ずしも1つの共通図式を抽出できるとは限らないとした。また、仮に抽出できたとしても、得られた共通図式の抽象度が高く、認知的際立ちが極めて低い場合に、類義語との区別ができなくなると指摘した。この観点に基づき、「共通図式モデル」を用いて意味分析する際、類義語とどのように区別して共通図式を抽出するかについて工夫する必要があると考えられる。

では、多義動詞の意味分析では2つのアプローチがどのように適用されているだろうか。白石・松田(2014)によると、「意味拡張モデル」は多義語の語義の意味拡張のプロセスを示すことで、L2学習者に複数の語義を関連付けて理解するのを促進す

るものであるとしている。これに対し、「共通図式モデル」は個々の語義を提示せず、すべての語義から抽出したある抽象的な概念イメージを L2 学習者に提示し、当該語の概念形成に働きかけるものであるという。このように、それぞれのアプローチが注目する焦点は異なり、具体的な意味分析では研究目的に応じたアプローチの選択が必要である。しかし、本研究の意味記述の精緻化という立場からみると、個々の語義を詳細的、網羅的に記述し、語義間の関係を包括的に捉えられる「意味拡張モデル」を用いることが望ましいと考えられよう。

3. プロトタイプの意味の認定

多義語のプロトタイプの意味は複数の語義の中で最も確立され、認知的際立ちが高く、最初に習得され、中立的なコンテキストで最も活性化されやすい語義である (Langacker, 1987)。その認定については数多くの研究で議論されてきたが、意見の一致を見るのが難しい。例えば、多義語分析でよく議論される英語前置詞 “Over” でも、<経路> (The plane flew over the city) と<静的位置> (The lamp is over the table) のどちらがプロトタイプの意味なのかについて、意見の相違が見られた。Brugman (1981) と Lakoff (1987)、Dewell (1994) は<経路>を、Tyler & Evans (2001) などは<静的位置>をプロトタイプの意味と認定している。このような意見の違いについて、松本 (2009) は意味分析の理論的枠組みの相違に起因すると指摘した。実際に、各研究ではいくつかの異なる認定基準が提示されており、且つ具体的な認定方法についての言及もない。このように、認定基準の相違や認定方法の曖昧さにより、分析結果が異なってしまう可能性もある。また、日本では瀬戸 (2007a, 2007b) はプロトタイプの意味を認定する 9 つの基準を提案したが、具体的な認定方法についての言及もなく、十分な説得力を持ち得ていない。

一方、田中 (1990) は、プロトタイプの意味の認定基準を羅列するより、それを「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」に分けて議論すべきだと主張している。また、「意味分析ではその両方向からの分析が必要となり、両者の間でどの程度整合性が見られるかを調べる必要がある」とも述べた (田中, 1990: 101)。この観点からみると、プロトタイプの意味には少なくとも 2 種類が存在し、両者

を混同すべきではない。そこで、以下では田中 (1990) の立場に基づき、「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」を分けて認定基準及び認定方法を概観していく。分類結果を表 2 で示した。

表 2. プロトタイプの意味の認定基準及び認定方法

分類	認定基準	認定方法	研究例
理論	具体性 観察可能性	各名詞項の意味特徴	田中(1990):Give
	用法制限:少	派生語の意味の制約	靱山ら(2003):ぬく 小川(2018):のむ
	具体性 観察可能性 用法制限:少	チェックリスト	鈴木(1997):つく
	拡張の起点	言及なし	鈴木(2003):つく 松本(2009):なし
心理	心理的顕著性	自由産出法	田中(1990):Hold 鈴木(1997):つく 鈴木(2007):流れる
		典型性判断テスト	田中(1990):Hold 加藤(2005):開,看
		典型例選出テスト	森山(2011):出す 大西(2016):見る
		類似性判断テスト	鐘(2016):切る

3.1 理論的プロトタイプ

理論的プロトタイプは言語学的な基準に基づくものであり、「多義語の意味派生が具体から抽象へ」という普遍的な転用方向 (池上, 1975; 靱山, 1995) を基本的な考えとする。表 2 で示す通り、「理論的プロトタイプ」には「イメージの具体性、観察可能性」、「用法上制限が少ない」及び「意味拡張の起点」という 3 つの認定基準が提案されている。以下、その具体的な認定方法を紹介する。

田中 (1990) は動作動詞 “Give” の理論的プロトタイプの意味として「イメージの具体性、観察可能性」を挙げている。具体的に “Give” のプロトタイプ項目が取りうる 3 つの名詞項 <Give (X,Y,Z)> の意味特徴として、最も基本的、具体的なものを抽出し、プロトタイプの意味を Give (X[+human],Y[+human],Z[+alienable]) と認定した。田中 (1990) は英語動詞を分析対象にしたが、実際に日本語の多義動詞の語義も構文の中でそれが取りうる名詞項によって限定されるため、それを日本語の多義動詞の意味分析に応用できると考えられる。

一方、「意味派生が具体から抽象へ」という認定

基準とは違い、靱山（1992, 1995）や靱山・深田（2003）は形態統語的制約から認定基準を提案し、「用法上制限が少ない、あるいは相対的に少ないもの」がプロトタイプであるとした。特に動詞を扱った靱山・深田（2003）は本動詞「ぬく」と複合動詞「～ぬく」の使用に制約があるかを言語事実に基づき分析し、使用制限の少ない「空間」的意味を持つ＜内部にはまり混んでいる物を引いて取り出す＞を「ぬく」のプロトタイプの意味と認定した。続く小川（2018）は動詞「のむ」を取り上げ、派生語となる複合動詞「のみ+V」と複合名詞「X（副詞・名詞・動詞）+のみ」の中で、基本動詞「のむ」のどの語義が活性化されるかを言語事実に基づき分析し、より多くの派生語で使用され、使用制限の少ない語義をプロトタイプの意味とした。例えば、「のみこむ」の場合、「のむ」の活性化された語義はく口からのどを通して体内に入れる＞であり、＜相手の気持ちを圧倒する＞ではないことから、後者が「のむ」のプロトタイプの意味ではないことがわかる。

鈴木（1997）は田中（1990）と靱山の一連の研究を踏まえ、多義動詞「つく」を対象に、「具体性」、「観察可能性」及び「用法制限が少ない」を基準にチェックリストを作り、より多くの基準を満たした語義をプロトタイプの意味と認定した。

その他にも、鈴木（2003）と松本（2009）は「意味拡張の起点」を認定基準の1つとして提案したが、具体的な認定方法についての言及がない。今後、この基準に基づく具体的な認定方法に関する検討が期待される。

3.2 心理的プロトタイプ

田中（1990）が主張する心理的プロトタイプの認定基準は「心理的に何が顕著であるか」（連想喚起力）である。心理的顕著性の決定要因として、頻度、社会・文化的重要性、知覚的顕著さ、記憶のしやすさ（Rosch & Mervis, 1975: 599）、年齢、文化、性別などの変数（田中, 1990: 101）などが挙げられる。どの要因が最も重要なのかについては1つの一貫した基準を決めるのは難しい。ただし、心理的プロトタイプがその言語を使用する集団の共通認識を表している点にはおそらく異論がないと思われる。そこで、一般的に心理的プロトタイプを測る際、その言語の母語話者を対象として心理実験を行うのが有効であるとされている。以下では、いくつかの心理実験の方法を紹介する。

田中（1990）は58名の英語母語話者に、“Hold”の思いつくままの典型文を3例自由に作成してもらう「自由産出法」を採用し、産出された文の中で最も頻度が高い文をプロトタイプと認定した。しかし、自由産出法で得られたデータには偏りが見られる可能性があることから、田中はさらに辞書から抽出した“Hold”の36個の例文を用いて母語話者に9段階スケールの典型性判断テストを実施し、典型度の最も高いものをプロトタイプの意味と認定した。

田中（1990）を踏まえ、鈴木（1997）と鈴木（2007）はそれぞれ多義動詞「つく」と「流れる」を対象に「自由産出法」の有効性を検証した。具体的には、鈴木（1997）は母語話者22名に「～が～をつく（突く／衝く）」の形で典型文2～3例を作成させ、産出率の最も高いものをプロトタイプの意味と認定した。鈴木（2007）は「Xが流れた」という文を提示し、母語話者36名に名詞Xに当てはまる語を1分間でできるだけ多く書くように指示した。そして、プロトタイプ効果理論に基づき、産出文の中で最も回答が多く、回答順序が早いものをプロトタイプの意味と認定した。また、田中（1990）に倣い、加藤（2005）は「開く」、「見る」の中国語対応語「開」、「看」の典型性を9段階スケールの典型性判断テストで調べ、その有効性を再検証した。

森山（2011）は「出す」が使われる73個の例文を利用し、母語話者20名にその最も典型的な例文を選出してもらい、選出率の最も高い例文に基づきプロトタイプの意味を認定した。続く大西（2016）は「見る」を対象に同様の方法を用いている。

鐘（2016）は日本語母語話者47名を対象に9段階スケールの類似性判断テストを実施し、「切る」が使われた様々な文と、その最も典型的な例文との間の類似性を調べた。また、類似性が最も高いものをプロトタイプの意味とした。

以上、自由産出法と典型性判断テスト、典型例選出テスト、類似性判断テストについて具体的な認定方法を概観した。分析結果からみると、全ての方法には有効性が見られたが、いくつかの点において限界も見受けられた。まず、実験方法について、自由産出法の場合、母語話者の数を確保できないと、得られた例文が十分でない可能性がある（鈴木, 1997）。典型性判断テストと典型例選出テスト、類似性判断テストの場合、例文をいかに漏れなく選定し、且つその形式を調整するかについて工夫する必

要がある(森山, 2015)。次に、実験協力者母語話者の面からみると、自由産出法の場合では個人の使用習慣によって得られたデータには偏りがある可能性がある(田中, 1990)。また、4つの方法に共通する問題点は、典型性という意味が的確に伝わっていない可能性があることである(田中, 1990)。つまり、母語話者が語義の典型性ではなく、例文全体の典型性で判断してしまう可能性がある。以上を踏まえ、心理実験でプロトタイプの意味を認定する際、実験方法、及び実験の意図を明確に伝えることなどの点でさらなる工夫が必要であることが示唆されている。

その他に、ある事例が特定の категория に属するかを測定するテストで、より反応時間の短いものをプロトタイプとする反応時間実験、学習順序の観察、プロトタイプとしてどの程度受容されるかを見る容認性判断テスト(菅谷, 2004)といった認定方法も提案された。しかし、これらの方法を日本語の多義動詞分析に応用した研究はまだ少なく、今後その有効性を日本語の多義動詞で検証する必要がある。

以上、「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」の認定基準及び認定方法を概観した。ここで注意すべき点は「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」が必ずしも一致するとは限らないことである。例えば、鈴木(2003)は動詞「つく」の意味分析を通して、具体性が高く、意味展開の起点となる<物理的な付着>(服にごみがつく)を「理論的プロトタイプ」と認定している。一方、心理的顕著性の高い<心理的な付着>(契約に厳しい条件がつく)を「心理的プロトタイプ」と認定している。このような結果を踏まえ、今後多義動詞の意味分析を厳密に行うためには、2種類のプロトタイプの意味を同時に調べ、両者の認定結果が一致するかを確認する必要があると考えられる。

4. 複数の語義の認定

認知意味論における多義語の語義認定は人間の外界認識と密接な関係があり、ある語の2つの意味用法が多義なのか、または単なる文脈の変容なのかについて研究者によって意見が異なる。また、その認定方法も様々であり、全体像を把握することが難しい。本章では多義動詞の語義の認定方法を概観するとともに、その有効性を確認する。本研究では語義の認定方法を分析材料の性質によって3種類に分けた。具体的には表3で示す通りである。以下ではこ

の3種類の認定方法について論じる。

表 3. 多義動詞の語義の認定方法

分類	語義の認定方法	研究例
関連語	上下関係、反義語、形態論的相違	国広(1982):Solid
	同位語、反義語、反対語、類義語、上位語	靱山(1993):買う
統合的関係	共起項	伊藤(2003):出る
	言語テスト	松本(2010):打つ
	文法的振る舞い	高橋(2016):考える、認める
関連語と統合的関係	共起項、項の意味特徴、対義語・類義語	仁田(2010):開く、あげる
	共起項、項の意味特徴、置換語	森山(2015):切る 大西(2016):見る

4.1 関連語による認定

国広(1982)は多義語の語義を認定するために、1)「上下関係をなす語の体系の中で、異なったレベルに位置する場合」、2)「異なった反義語が存在する場合」、3)「形態論的な相違が存在する場合」という3つの手掛かりを提案した。

国広(1982)は英語多義語を分析対象にしているが、それを日本語に応用した研究として靱山(1993)が挙げられる。具体的に、靱山(1993)は国広(1982)が提案した1)と2)の基準を再検討すると同時に、より広く各語義を取り巻く様々な関連語の違いに注目し、非両立関係にある同位語、反義語、反対語、類義語、上位語の違いという認定基準を提案した。また、様々な言語事実に基づきその有効性を検証した。分析結果からみると、同位語、反義語、類義語及び上位語の違いという認定基準は名詞、形容詞、動詞の語義認定において有効性が見られた。反対語の違いという認定基準は、「買う」と「売る」のように、同一の出来事を対立する語から捉えられる場合のみ有効であり、適用範囲が限られていることがわかった。

一方、高橋(2016)はある語の2つの語義が属する意味分野が非常に近い場合、「関連語の違い」という認定基準が説得力に欠けると指摘している。例えば、「ひく」の様々な語義の類義語を『類語国語辞典』で調べると、「綱をひく」と「子供の手をひいて歩く」という2つの用法が共に「近寄せる」という category に属することが確認できる。しかし、「子供の手をひいて歩く」は<子供を自分のほうに近寄せる>だけでなく、<子供を自分と一緒に

移動させる」という意味も含意している。類義語「近寄せる」だけでは両者の明確な区別が付かない。ゆえに、「関連語による認定」は意味分野の近い語義の区別において限界が見られると言えるだろう。このような状況に置かれた場合、また別の手法を考えなければならない。そこで、次節ではもう1つの認定方法、「統合的關係による認定」を紹介する。

4.2 統合的關係による認定

「統合的關係による認定」は多義語の個々の語義と関わる統合的關係を手掛かりとした認定方法である。本研究ではその手掛かりをさらに「共起項」、「言語テスト」及び「文法的振る舞い」の3種類に分けた。以下ではそれぞれの認定方法を概観する。

まず、共起項を扱った研究には伊藤（2003）がある。伊藤（2003）は動詞「出る」の4つの語義がそれぞれ決まった構文の中で活性化され、決まった共起項が存在すると指摘し、「出る」の語義をそれが用いられる共起項によって限定されると主張した。しかし、多義動詞の語義はそれが取りうる共起項とは関連があると言えるが、両者が必ず一対一の関係なのかについて疑問が生じる。この点に関し、靱山（2011）は様々な言語事実に基づき分析し、統合的關係（共起項）と語義の間には、「統合的關係が異なることと多義的別義が異なることが対応する場合」、「統合的關係は同じであるが、多義的別義としては異なる場合」、「統合的關係は異なるが、多義的別義としては同じである場合」という3種類の関係があると指摘した。特に（1）（2）のように、「統合的關係は同じであるが、多義的別義としては異なる場合」が存在することから、両者が必ずしも一対一の関係とは限らないと論じた。ゆえに、共起項だけによる認定方法には限界があることが示唆される。

（1）太郎が本を次郎にやった。（靱山, 2011: 70）

（2）聖徳太子が小野妹子を隋にやった。（靱山, 2011: 70）

一方、「言語テスト」を扱った松本（2010）は、語義の分離可能性を調べる分離テストと統合可能性を調べる統合テストを提案した。具体的に分離テストは、（3）のように1つの文の中で同じ語を異なる意味で用いることができるかを見るテストである。統合テストは、（4）のように、「次郎の頬を打つ」（＜物理的なダメージを与える＞）と「次の対策を

打つ」（＜作戦を講じる＞）を1つの文の中で同時に使用し、語義を統合できるかを見るテストである。

（3）太郎は起きて（目覚めて）いたけど、起きて（身を起こして）はいなかった。（松本, 2010: 25）

（4）*太郎は、次郎の頬と次の対策を打った。（松本, 2010: 26）

しかし、言語テストに対し、批判的意見を持つ研究者もいる。Taylor（1989）は言語テストが異なる抽象度のレベルで語義を認定するものであり、2つの語義を分けるか、統合するかは非常に繊細な直感的判断に頼ると指摘している。ゆえに、言語テストに合格できるかどうかで語義を認定する際、主観的判断に陥る可能性があることに注意されたい。一方、靱山（2016）は意味の自立性という観点から多義語を「典型的な多義語」（例えば「あがる」）と「単義語寄りの多義語⁵」（例えば「学校」、「教える」）に分け、「単義語寄りの多義語」の複数の語義は言語テストで区別できない場合があると指摘した。例えば「教える」の場合、「機械の使い方を教える」では＜学問・技術・価値観等を教授する＞を意味し、「責任者のアドレスを教える」では＜簡単な情報を知るようにする＞を意味している。しかし、両者は（5）の中で同時使用できることから、語義の区別が付かないことがわかる。ゆえに、言語テストは「単義語寄りの多義語」の語義認定において限界が見られると言えるだろう。

（5）Aさんがこの機械の使い方と責任者のアドレスを教えてくれた。（靱山, 2016: 516）

（6）一切れの厚さを7ミリにしようか、1センチにしようかと考える。（高橋, 2016: 2）

（7）例えば地球が球状の物体ではなく巨大なコーヒー・テーブルであると考える。（高橋, 2016: 2）

このほか、高橋（2016）は思考動詞を対象に、「命令形による使用の可否」、「ニ使役が可能かどうか」などの文法的振る舞いから語義の認定を行った。例えば、思考動詞「考える」には（6）＜知力を働かせる＞と（7）＜ある事態を仮定する＞の2つの意味用法がある。「命令形による使用の可否」から見ると、（6）は使用不可であるのに対し、（7）は使用可能である。ゆえに、（6）と（7）を2つの異なる

る語義と認定できる。しかし、この認定方法では、複数の文法的振る舞いを組み合わせるとすべての語義を有効的に認定できるが、単独にある文法的振る舞いを使用するだけではやはり限界が見られる。また、文法的振る舞いの基準をいかに設定することも難しい問題であり、分析対象語の特徴から見てもその基準が様々であるのは当然のことであろう。

以上、「関連語による認定」と「統合的關係による認定」の一方だけを使用すると、適用範囲が限られることが示された。そこで、この二種類の方法を組み合わせると適用範囲を広げようとする試みも現れた。次節で詳しく紹介する。

4.3 関連語と統合的關係を組み合わせた認定

「関連語と統合的關係を組み合わせた認定」といっても、正確には「関連語と共起項を組み合わせた認定」である。それを扱った研究として仁田 (2010) と森山 (2015) などが挙げられる。

仁田 (2010) は多義動詞の各語義が取りうる共起項の種類に焦点を当て、動詞の多義性が自らの取りうる共起項の種類と関連があると述べた。しかし、前節で述べたように、共起項の種類と語義とは必ず一対一の関係ではないため、それだけで認定すると限界が見られる。そこで、仁田 (2010) は各共起項の名詞句の意味特徴を分析することでその限界を克服する方法を提案した。さらに、共起項及びその名詞句の意味特徴の相違によって語義の明確な区別が付かない場合、対義語及び類義語を提示することで意味分野の相違を示す方法を提案した。このように、仁田 (2010) は関連語または統合的關係による認定の一方だけの有効性を主張するのではなく、対象語の特性に基づき適切な方法を選び、場合によっては両者を統合する必要があることを論じた。

森山 (2015) は同じ立場から、「切る」の意味分析を通して、多義語の個々の語義が取りうる共起項はある程度決まっており、意味記述の際に動詞自体の意味(置換語)を提示するとともに、共起項とその意味特徴を明記する必要があると述べた。この認定方法は仁田 (2010) と表裏一体のもので、より多くの多義動詞に応用できると思われる。同様の方法は大西 (2016) の「見る」でも用いられている。

以上、3種類の語義認定方法の適用範囲を検討した。結論として、1)「関連語による認定」は大まかな語義分類において有効であるが、語義を細かく分ける際に意味分野の近い語義との区別が付きにくい

ため、適用範囲が限られる。2)「統合的關係による認定」のうち、「共起項」は語義とは常に一対一の関係ではないため、それだけで認定すると危険性が生じる。「言語テスト」はどの程度の抽象度で語義を分けるべきかについて主観に頼りやすく、また「単義語寄りの多義語」の分析においても限界が見られた。「文法的振る舞い」では具体的な文法的振る舞いの選定について工夫する必要がある。さらに、3) 適用範囲を広げるために、上記二種類の方法を組み合わせると望ましいことも示唆されている。特に多義動詞の語義はそれが取りうる共起項と関連があるため、「関連語と共起項を組み合わせた認定」の適用範囲が最も広い。

5. 語義の相互関係

多義動詞の個々の語義を認定する以外、語義間の関連性を明らかにすることも重要である。多義語の意味拡張の動機付けの解明を扱った代表的なものとして Lakoff & Johnson (1980) のメタファー研究がある。ここでメタファーは本来の修辞学の枠を超えて語の多義現象(意味拡張)とも深く関与すると指摘されている。その後、英語前置詞“Over”などを巡る様々な議論を通してメトニミーの重要性が唱えられるようになった。そして近年、日本では佐藤 (1978)、靱山 (2001) がシネクドキをメトニミーから解放させ、それをメタファーとメトニミーと同一のレベルで見るという観点が一般的になっている。特に靱山 (2001) が語義の関連性をこの3つの動機付けから捉える重要性を主張しており、最近の多義語研究の多くがそれに基づいて議論を展開している。

しかし、意味拡張の動機付けについてはある程度合意に達したが、具体的な意味展開パターンを解明した研究は管見の限りまだ少ない。これまでに多義語の意味展開パターンを論じた研究として国広 (1982, 1994)、瀬戸 (2007a, 2007b)、松本 (2010) が挙げられる(表4を参照)。国広 (1982, 1994) は様々な多義語の分析を通して意味展開パターンを11種類に分類した。瀬戸 (2007a, 2007b) は英語多義動詞学習辞典を開発する過程を通してメタファーに3種類、メトニミーに35種類、さらにシネクドキに2種類の下位分類を設け、その精緻化を試みた。松本 (2010) は意味展開パターンを大きく4種類に分類し、その下に下位分類を設けている。

表 4. 意味展開パターンの分類

研究例	意味展開パターン
国広 (1982,1994)	心的視点の相違、転移、部分転用、推論的意味、比喩的転用、提喩的転用、換喩的転用、具象化転用、上下関係の意味、特殊化転用、集合化
瀬戸 (2007a,2007b)	メタファー(3種類)、メトニミー (35種類)、シネクドキ (2種類)
松本(2010)	概念メタファー (6種類)、メトニミー (19種類)、一般化と特殊化、適応例ベースの意味派生

これらの研究を通して、以下の 2 点が示唆される。まず、意味展開パターンに関する検討がまだ十分とは言えない。多義語分析は研究者の内省に頼るところが大きく、意味展開パターンを明確にしないと、研究者によって異なる結果が出る可能性が高い。次に、各研究は異なる対象語を分析しており、得られた意味展開パターンも大きく異なる。このような結果を踏まえ、今後具体的な意味分析で何を基準にすべきかについて、簡単には結論付けられないことがわかる。そもそも多義語の意味展開には語によって独自の特徴が存在する可能性もあり (森山, 2017)、個々の対象語に適応した意味展開パターンの設定が必要であろう。ただし、意味記述の曖昧さを解消させるために、意味展開パターンの精緻化が必要不可欠な課題になっている。

6. まとめと今後の課題

6.1 今後の多義動詞の意味記述の精緻化に向けて

本章では、上述した多義動詞の研究例からその全体像を把握し、多義動詞の意味記述の今後の課題について述べる。

まず、多義語分析の 4 つの課題のいくつかを扱った研究はあるが、すべての課題を扱った研究はない。また、本研究で取り上げた研究例以外にも多数の意味分析研究があるが、その多くは 4 つの課題に関する明確な言及なしに意味記述をしたものである。この現状からみると、多義動詞の意味分析研究にはかなりの不備があると言える。意味分析の曖昧性を解消し、分析結果の客観性を高めるために、その第一歩として上記 4 つの課題の解決を厳密に行うことが求められる。

次に課題別にみると、「理論的枠組み」の使用は多くの研究で明示的、または暗示的に提示されている。しかし、残り 3 つの課題の解決では不備がみられた。(1) 田中 (1990)、鈴木 (1997, 2003) を除き、

ほとんどの研究では「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」を区別していない。また、「理論的プロトタイプ」の認定ではいくつかの方法が提案されたが、著者に偏りがみられ、認定基準や認定方法に関する検討が十分とは言えない。一方、「心理的プロトタイプ」の認定方法は多様であるが、実験方法などの面で改善の余地があると思われる。

(2) 語義の認定では 3 種類の方法が紹介されたが、それぞれ適用できる多義語が限られている。今後、様々な多義動詞でさらなる検討を加え、より多くの多義動詞に適用できる認定方法を探ることが期待される。(3) 意味展開パターンの解明を扱った研究は 5 本しかない。そのうち英語動詞を対象とした瀬戸 (2007a, 2007b) の分類が最も詳細、且つ具体的である。今後、瀬戸 (2007a, 2007b) の分類の妥当性を日本語の多義動詞で検証する必要がある。また、それを参考に日本語の多義動詞に適応した意味展開パターンの設定も必要である。

以上を踏まえ、本研究では多義動詞の意味記述の精緻化に向けて 4 つの課題を解決するために以下のことを提案したい。1) 多義動詞の意味記述を精緻化させるために個々の語義を詳細、且つ網羅的に捉えられる「意味拡張モデル」を用いる。2) 「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」を分けて議論を展開し、両者が一致するかを調べる。3) 「関連語と共起項を組み合わせた方法」で多義動詞の語義を認定する。4) 複数の語義の関係を捉える際、分析対象語の特性に従い、相応しい意味展開パターンを設定する。これらの提案を通して多義動詞の意味分析の 4 つの課題をすべて解決し、意味記述の精緻化が実現できるならば、分析結果の不一致をある程度解消し、客観性を高めることが期待できる。

また、従来の日本語教育の現場では、多義動詞の語義を教える際、プロトタイプの意味からどのように拡張し、新たな意味が生じるかを説明することが少ない。それゆえ、L2 学習者が多義動詞の語義を習得する際、母語を介して理解する場合が多い。本研究で提案した語義記述方法を教育現場に活用できれば、一見つながりが見えない多義動詞の複数の語義が関連付けられ、L2 学習者の意味理解の一助にもなると思われる。さらに、今後多義語学習のための辞書開発にも寄与するところ大きい。

6.2 今後の課題

本研究は内省分析の方法論の検討に焦点を絞っ

たものであり、今後具体的な多義動詞を取り上げ、得られた知見の有効性を検証する必要がある。また、多義動詞の分析では内省分析以外に、心理実験とコーパス分析という客観性の高い手法もあるが、これらの手法を用いて多義動詞の意味構造を明らかにすることも必要であり、今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、貴重なご助言をくださった森山新先生、査読委員の方々、ネイティブチェックをしてくださった野村琴菜様、竹内美奈様、山田美奈様に心より感謝申し上げます。

注

1. 詳しくは Lakoff (1987) と Brugman (1981)、Dewell (1994)、Tyler & Evans (2001) などを参照のこと。
2. 「動機づけ」とは、認知意味論の観点では、ある語が従来の意味から新しい意味に転用される時、我々の身体性や経験を通して既存知識で新しい概念を捉える際の手がかりである。
3. コアの意味は 1) 多義語の複数の意味から抽出された最大公約数的な意味であり、2) 語の意味範囲全体を捉える概念である (田中, 1990: 22)。
4. 現象素とはある語が指す外界の物、動き、属性などで、五感で直接に捉えられるものである。その全体の一部に焦点が絞られることによって認知的多義が成り立つ。
5. 「単義語寄りの多義語」には「多義語の一方の意味の自立性が低い場合」と「多義語のフレーム全体の意味の自立性が高い場合」、「多義語のスキーマの意味の自立性が高い場合」の 3 種類がある (榎山, 2016: 516)。

参考文献

- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館書店
- 伊藤健人 (2003) 「動詞の意味と構文の意味—『出る』の多義性に関する構文文法的アプローチ—」『明海日本語』(8), 39-52.
- 大西はんな (2016) 「多義動詞『みる』の意味構造分析(基本多義動詞の意味構造、及び習得との関係についての実証的研究)」『日本認知言語学会論文集』(16), 543-548.
- 小川朱美 (2018) 「多義語『のむ』の意味分析」『名古屋大学人文学フォーラム』(1), 203-217.
- 加藤藤人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論、言語転移理論の観点から—」『第二言語としての日本語の習得研究』(8), 5-23.
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 国広哲弥 (1994) 「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』(106), 22-44.
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』講談社
- 白石知代・松田文子 (2014) 「多義動詞『ぬく』のコアと

それを用いた複合動詞『V-ぬく』の意味記述—L2 学習者の意味推測を支援するために—」『日本語教育』(159), 1-16.

- 鐘慧盈 (2016) 「L2 『きる』の意味構造がその習得に及ぼす影響(基本多義動詞の意味構造、及び習得との関係についての実証的研究)」『日本認知言語学会論文集』(16), 555-560.
- 菅谷奈津恵 (2004) 「プロトタイプ理論と第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』(7), 121-140.
- 鈴木幸平 (2007) 「語の意味とプロトタイプの実験を用いた検証:『流れた』を例として」『KLS』(27), 151-161.
- 鈴木智美 (1997) 「多義語『ツク』(突・衝・撞・搗・吐)の意味分析」『名古屋大学人文科学研究』(26), 165-191.
- 鈴木智美 (2003) 「多義語の意味のネットワーク構造における心理的なプロトタイプ度の高さの位置付け—多義語『ツク』(付・着・就・即・憑・点)のネットワーク構造を通して—」『日本語教育』(116), 59-68.
- 瀬戸賢一 (2007a) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』ひつじ書房
- 瀬戸賢一 (2007b) 『英語多義ネットワーク辞典』小学館
- 高橋圭介 (2016) 「文法的振る舞いに着目した多義的別義の認定」『北海道教育大学函館人文学会人文論究』(85), 1-10.
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』三友社出版
- 田中茂範 (2004) 「基本語の意味のとらえ方—基本動詞におけるコア理論の有効性」『日本語教育』(121), 3-13.
- 仁田義雄 (2010) 『語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房
- 松田文子 (2006a) 「コア図式を用いた意味記述の試み—多義動詞『ひく』を事例として—」『留学生教育』(11), 79-86.
- 松田文子 (2006b) 「コア図式を用いた多義動詞『とる』の認知意味論的説明」『日本語科学』(19), 119-132.
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』大修館書店
- 松本曜 (2009) 「多義語における中心的意味とその典型性—概念的 中心性と機能的 中心性—」『Sophia Linguistica』(57), 89-99.
- 松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美編『ひつじ意味論講座の第 1 巻 語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房
- 榎山洋介 (1992) 「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』, 185-199, 名古屋大学出版会
- 榎山洋介 (1993) 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐる—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』(1), 35-57.
- 榎山洋介 (1995) 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性: 空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』(14), 621-639.
- 榎山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデル

- と比喻』『認知言語学論考』(1), 29-58, ひつじ書房
- 榎山洋介・深田智 (2003) 「多義性」松本曜編『認知意味論』, 135-186, 大修館書店
- 榎山洋介 (2011) 「多義語における統合的關係と多義的別義の關係」『名古屋大学日本語・日本文化論集』(19), 67-87.
- 榎山洋介 (2016) 「多義語の多様性—典型的な多義語と単義語寄りの多義語—」『日本認知言語学会論文集』(16), 512-517.
- 森山新 (2011) 『『出す』の意味構造に関する実験的研究—日本語学習辞典の開発のために—』『日本認知言語学会論文集』(11), 277-286.
- 森山新 (2012) 「認知意味論的観点からの『切る』の意味構造分析」『同日語文学研究』(27), 147-159.
- 森山新 (2015) 「日本語多義動詞『切る』の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』(1), 138-155.
- 森山新 (2016) 「上下メタファーの観点からみた動詞『あがる』の意味構造分析—内省分析法の確立をめざして」『お茶の水女子大学人文科学研究』(12), 231-241.
- 森山新 (2017) 「日本語学習辞典開発のための多義基本動詞の意味構造分析法の確立—内省分析を中心として—」『日本認知言語学会論文集』(17), 402-408.
- 李澤熊 (2015) 「動詞『おす』の意味分析—日本語教育の観点から—」『言語文化論集』37(1), 3-14.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
- Brugman, C. M. (1981) *The story of over: Polysemy, semantics, and the structure of the lexicon*. New York: Garland.
- Dewell, R. B. (1994) Over again: Image-schema transformations in semantic analysis. *Cognitive Linguistics*, 5(4), 351-380.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.1 Stanford: Stanford University Press.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances: Studies in the internal structure of categories. *Cognitive psychology*, 7(4), 573-605.
- Taylor, J. R. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press. (辻幸夫 (訳) 2008 『認知言語学のための14章』(第3版) 紀伊国屋書店)
- Tyler, A. & Evans, V. (2001) Reconsidering prepositional polysemy networks: The case of over. *Language*, 77, 724-765.

さい ぎょうぶん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
sayisang77@hotmail.com

An Overview of the Semantic Analysis Method of Polysemous Verbs from the Viewpoint of Cognitive Semantics

— Aiming to Elaborate the Semantic Description of Polysemous Verbs —

CUI Xiaowen

Abstract

In this study, in order to elaborate the semantic description of a polysemous verb, centering on four problems of polysemous word semantic analysis, we surveyed methods that were used in the previous researches and how they were applied. As a result, the following issues were clarified. 1) In the theoretical framework of semantic analysis, there are mainly two approaches, “semantic extension model” and “common schema model”. It is desirable to use “semantic extension model” in order to elaborate a verb’s semantic description. 2) The prototype meaning can be classified into two categories, i.e. “theoretical prototype” and “psychological prototype”, and it is necessary to verify if they are consistent. 3) When identifying multiple word meanings, the method combining related words and cases has the widest application scope. 4) Multiple word meanings are related by metaphorical, metonymic and synecdochic connections, but it is necessary to identify the semantic extension pattern of each word meaning. Based on the results above, the possibility of the semantic analysis of polysemous verbs with the aim of elaborating their semantic descriptions is presented.

【Keywords】 polysemous verb, theoretical framework, prototype, word meaning distinction, semantic extension pattern

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)